文献紹介

彦根市史編集委員会編
『新修 彦根市史 第10巻　景観編』
彦根市　2011年１月　303頁　3,000円

近年刊行の各地の地方史誌類はそれぞれ特色をもつ編集がなされているが[1]，平成13年から刊行が開始された『新修 彦根市史 』全13巻の最新刊である本書も，地理学的にも大いに注目される内容を有している。

まずは，章構成にそって本書の内容の概要を紹介していくことにする。

「はじめに」（２～10頁）の前半部には，彦根市史編集委員会の副委員長で，本巻の担当委員を務める西川幸治氏執筆の「編集にあたって―彦根の文化的景観―」が置かれている。ここで，「本巻のねらい」が，彦根という地域固有な景観の現状と歴史的変遷を明らかにして，その文化的景観を活かした町づくりを展望するということにあると明記される。ついで，文化財保存の考え方が近年多様化するなかで，文化的景観が法的にも保護・保存の対象となったことが述べられ，「彦根城築城以前の景観」「彦根城の文化的景観」「彦根城下町の文化的景観」「近代化と彦根」「現代社会と今後の展望」といった小見出しで，本巻の編集意図にそって具体的な重要事項が簡略に記されている。それに続く後半部は「本巻の構成」と題して１～８章の章別の内容の概要が記されており，前半部と後半部を合わせて優れた読者案内となっている。

１章「自然と人の営み」（11～42頁）では，まず１節「彦根市の地形と人との関わり」で，村落景観の基本的な構成要素である地形と灌漑について，市域の中央部を北西方向に貫流する犬上川の地形図と地形断面図，明治初年の灌漑用水図を見やすく示し，「扇状地の渇水対策」「湖岸部の排水対策」「山間部の用水」の小見出しでは，現状を写した写真と古い斜め空中写真とを配して説明がなされている。２節～４節では市域を「やま」「さと」「うみ」と３区分し，さらに２節では「山間の植生と景観」「山里の変貌」，３節では「かっとりの里」「しょうずの里」「里山」「里山の変貌」，４節では「湖辺の遺跡」「湖辺の集落」「琵琶湖と内湖」といった小見出しを立てて，新旧の写真や地図類など多様な図版を豊富に用いて説明されている。

２章「中世から近世へ」（43～58頁）は，１節「彦根山参詣」，２節「湖東と湖北の城づくり」，３節「佐和山城と城下」，４節「井伊軍団の移動」からなり，城絵図をはじめ各種の地図類が示されている。しかし，市域の歴史上著名な佐和山城に関する３節は，廃城以前の状況を知るための資料に乏しいため，わずか４ページが割り当てられているのみである。

３章「彦根城」には多くのページが割かれており，まず１節「天守と城郭」（60～81頁）は「彦根城の築城」「彦根城のかたち」「彦根城天守」「彦根城の櫓」「彦根城の石垣」「城山の植生」の小見出しのもとに，文化11年の「御城内御絵図」を活用しつつ，城内各場所の状況が新旧の写真や建築立面図・平面図で極めて分かりやすく説明されている。続く２節「城主のすまい」（82～97頁）でも，「本丸御広間」「表御殿」「槻御殿」「浜御殿」といった建物ごとに，一層詳細な建築学的図面が写真や絵図とともに用いられている。３節「近世ネットワークのなかの彦根」（98～102頁）では，江戸の上・中・下などの各屋敷や京屋敷，さらに大津・大阪の蔵屋敷についても紹介されている。

４章「城下町」は本書で最大のページ数が割かれている章である。１節「城下町のかたち」（104～123頁）はその総説的役割を果たしており，「城下町の造成」「城下町の構成」「城下町の御門」「彦根城下の町名とその変遷」といった小見出しのもとに，天保７年「御城下惣絵図」を活用しつつ，城下における武士の階層別居住区や町屋の地区別居住区などについて，各種の復原・復元図や古写真など，多様な図版を用いて説明がなされている。以下，３重の堀をメルクマールとする城下の３エリアについて，２節では内堀と中堀に囲まれた「内曲輪」（124～131頁）が，３節では中堀と外堀に囲まれた「第三郭」（132～149頁）が，４節では外堀より外側の「郭外」（150～168頁）が

扱われている。さらに，2節は「重臣の居住区」「藩校弘講道館」に，3節は「家臣団の居住区」「町人の居住区」「上・下魚屋町通り」「伝馬町界隈」に，4節は「家臣団の居住区と足軽組屋敷」「川原町界隈」「七曲がりの町家」にそれぞれ細分されて，各種の絵図・地図・建築図面や写真などで詳しく説明されている。とりわけ3節以降では，それぞれの地区の代表的な住宅を取りあげて，用途別に色分けした平面図や断面図・立面図と現状を示す写真などをセットとして，建築学・建築史的説明が加えられている。

5章「宿場町」(169～186頁）では，1節「中山道と彦根の宿場町」で近世の中山道と宿場町を概観した後，市域内の中山道に沿う2つの宿場町について，2節「高宮宿の町なみ」と3節「鳥居本宿の町なみ」において，代表的な住宅をも含めて，各種の絵図・図面・写真などで説明されている。

6章「集落景観」(187～216頁）では，上記の城下町と宿場町を除く彦根市域の集落を，立地環境から1節「農村集落」，2節「湖辺の集落」，3節「山間集落」に分け，それぞれの代表的な集落として肥田と日夏，八坂と三津屋と下石寺，男鬼を取りあげて，明治初年の村絵図をはじめ，集落連続立面図から住宅内の水廻り設備図，あるいは茅葺き屋根の吹き替えに纏わる写真まで，多種多様な図版を用いて説明されている。

7章「近代化のあゆみ」(217～246頁）では，1節「城下町の変貌」で都市計画図や新旧の現地写真などを使いつつ，彦根市街地の拡大と街路拡幅が述べられているのに対して，2節「町なみの改造」では学校をはじめとする公共建築物に焦点を当てて，貴重な古写真や建物平面図などを多数紹介しつつ述べられている。末尾の3節「けやき並木は残った」では，城下町建設にあたって流路の付け替え・直線化がなされた芹川の事例が紹介されている。

本書の結章となる8章「展望―文化的景観を活かしたまちづくり」(247～269頁）では，1節「彦根の保存修景」，2節「彦根の史跡整備」に続いて，3節「わたしたちのまちを伝える」のなかで，市内の小・中学生を対象とした「わたしたちのまちを描く絵画コンクール」の優秀作品16点が作者の説明文と合わせて紹介されている。

以上，極めて豊富なデータを盛り込んだ本書の内容を，章・節のタイトルや小見出しを中心に紹介した。それらを通して容易にご理解いただけるように，本書の最大の特徴は，既往の建築学・建築史研究成果をふんだんに取り入れた多種・多様な図面と新旧の写真が極めて大量に収められていることである。そして，そのような莫大な量の図版が鮮明かつ明瞭に読み取れるように，本書がA4判と大型の判形をとり，しかもオールカラーで印刷されていることを特記したい。この体裁は，以前に『新修　彦根市史』の別冊として編集・刊行された『彦根 明治の古地図 1～3』(2001～2003)（前掲1④）と同じである。当該市史の他の巻は大方の地方史誌類と同様にA5判なので，全巻の体裁統一よりも収録内容に相応しい体裁を認める，という編集委員会の見識を示したものといえ，それが文字通り英断だったことは本巻を見れば明らかである。

評者は，今回の『新修　彦根市史』全13巻刊行に際しての個別巻名ラインナップを見た時から，この景観編に大いに期待していたが，長年彦根を研究してこられた西川氏の編集ならではの，まさに当初の期待に違わぬ，いや期待以上の素晴らしい内容であるといえる[2)]。多数の図面に基づく建築学・建築史的な色彩の濃い本書は，地理学とりわけ歴史地理学研究者にとって，資料的にも大変参考になるばかりでなく，景観に関する隣接分野の見方を具体的に知ることができる文献となっている。また一方で本書は，懸案のUNESCO世界遺産登録の基礎資料にも十分なりうる内容を備えており，彦根市民にとって郷土の誇りを再認識する素晴らしい財産になるとともに，観光客にとっても極めて高度な内容を丁寧に解説した最高の案内書となりうるであろう。評者は，これまでに勤務先の学生や院生あるいは家族を連れて，城下町彦根を歴史地理的観点から見学してまわったが，そのおりに本書があったら最高の参考書になったのになあ，と今更ながら残念に思える。A4判オールカラーで300頁を超えるにもかかわらず，一般の出版業者には到底期待し得ない低価格であることからも，心から購入をお薦めしたい。

（戸祭由美夫）

〔注〕

1）歴史地理学的にも優れた編集のなされた地方史誌類に関して，評者もかつて以下の①～④の書評・文献紹介をした。また，地方史誌類のなかの絵図・地図の巻に焦点を当てて，礒永和貴氏が⑤のような展望を著わしている。

①林屋辰三郎・藤岡謙二郎共編『宇治市史第5巻 ―宇治川東部の生活と環境―』地理学評論53-10，1980，674-676頁。

②『福井県史 資料編16上巻［絵図・地図］』地理科学45-3，1990，66-67頁。

③『福井県史 資料編16下巻［条里復原図］』地理科学47-4，1992，53-54頁。

④彦根市史編集委員会編『彦根 明治の古地図 1～3』歴史地理学45-4（215），2003，29-31頁。

⑤礒永和貴「地域史のなかの絵図 ―自治体史の絵図・地図編―」歴史学研究841，2008，55-63頁。

2）本書の編集は，西川氏と同じく彦根市史編集委員会委員の濱崎一志氏の二名が担当委員で，両氏のほかに，石田潤一郎・土屋敦夫・野間直彦・石川慎治・老 文子・亀山芳香・古関大樹・中井 均・早川 圭・林 博通・小林隆の各氏が執筆者として名を連ね，各氏の執筆個所は極めて細かく配分されている。